山岸文庫蔵『宗尊親王三百首』解題・翻刻

久保貴子

本学山岸文庫には『宗尊親王三百首』と題された写本一冊（山岸文庫請求番号「三〇二」番）が蔵されている。『宗尊親王三百首』は別に『文応三百首』『中務卿親王三百首和歌』『東関竹園三百首』『鎌倉中書王御詠』などとも呼ばれる、宗尊親王若き日の歌集である。成立は文応元年（一二六〇）十月以前であることは動かない。

この歌集の伝本は約二十数本現存するが、初めて本格的な系統分類を示したのが『新編国歌大観』の解題（平成四年四月刊）である。そこで、小林強氏は二十七本にも及ぶ諸本を整理し、一類本、二類本、三類本と分類された（解題は井上宗雄氏、兼築信行氏との共同執筆であるが、分類をなされたのはその付記から小林氏と判断される）。今後の伝本研究を領導する、すぐれた成果といい得る。

この山岸文庫蔵本は『新編国歌大観』には未調査本として挙がっている。その後、『新編国歌大観』の成果を踏まえつつ、別の観点も加えて伝本系統について考察された佐藤智広氏は、この山岸文庫蔵本も資料に加えて本文の異同を整理された（「宗尊親王『文応三百首』伝本分類私考」、「筑波大学平家部会論集　第五集」平成七年十一月刊）。

『宗尊親王三百首』は小林氏もつとに述べられたように、「諸本間には、各点者の合点や本文の異同が極めて多く、厳密な伝本の系統分類は今後の課題」であることは確かであろう。そのための基礎資料として、佐藤氏の貴重な言及を除いてはほとんど学界未紹介であった山岸文庫蔵本を全文翻刻する意味は大きいと思われる。

次に、この本の簡略な書誌事項を示しておく。

実践女子大学山岸文庫所蔵『宗尊親王三百首』一冊

袋綴装（四目綴、綴糸萌黄色）。近世写。

表紙、薄香色無地紙表紙。二七・八糎×二〇・四糎。外題、表紙左肩に赤朽葉色唐草文様蠟牋紙、八・六糎×四・四糎を貼付「宗尊親王三百首」と墨書（本文と同筆か）。表紙右肩に「（冷泉家本）」と朱筆で打付書（山岸徳平氏筆か）。

内題「中務親王三百首和歌」（二丁表一行）。

料紙、楮斐漉混紙。見返し料紙共紙。前遊紙一丁、後遊紙なし。墨付二十一丁（一丁裏・二一丁裏、白紙）。

印記「山岸文庫」の長方形朱印（表紙右下、一丁表右下）。「実践女子大学図書館印」の長円形朱印（二一丁裏左下）。

毎半葉十二行。一行二十五字内外、和歌は一行書き。

頓阿（二〇丁表）・李部王（二〇丁裏）・為栄（二一丁表）それぞれの奥書と、山岸氏の識語（裏見返し）を有する。

所々に朱・青筆による書入れ、ミセケチなどあり。保存状態は極めて良く、虫損・湿汚の痕など殆どなし。

部立ごとに収められた歌数は以下のとおり。（　）内の漢数字は山岸文庫蔵本に仮に付した歌番号を示す。

春　―　七十首（一～七〇）

夏　―　三十首（七一～一〇〇）

秋 ― 七十首（一〇一～一七〇）
冬 ― 三十首（一七一～二〇〇）
恋 ― 七十首（二〇一～二七〇）
雑 ― 三十首（二七一～三〇〇）

この山岸文庫蔵本の諸本の中に占める位置について、いささか触れておきたい。『宗尊親王三百首』の諸本は先述したように、小林強氏によって、三つの系統に分けられている。それは大別して、為家の合点と評語のみを有する系統（二類本）、それに加えて基家の評語と計八名の手になる合点を有する系統（一類本）、抄出本の系統（三類本）、の三つである。一類本と二類本との相違が何故生じたのか、大きな問題点である。これは、当初為家のみに加点が要請されていたのが、後に基家らにも加点の依頼が行われたことに起因すると推測するのは自然であろう。小林氏は二類本が御子左家に、一類本が反御予左家に伝来していったものと推測されている。

ところで、この山岸文庫蔵本は佐藤氏によって、他の二十一本の伝本とともに、和歌本文の異同が調査されている。佐藤氏の調査は新たな諸本系統整理の観点からなされているので、特に山岸文庫本の位置付けに焦点を合わせたものではないが、この本が一類本の中でも最善本と目される天理図書館蔵春海文庫蔵本と同系統の本文を持つことを明らかにしている。管見からも、この佐藤氏の判断は肯定し得ると思われる。

以上のことを確認した上で、この山岸文庫蔵本の奥書について、いささか検討しておきたい。奥書は先ず（二〇丁表）に、

此御歌先年書写之処為人被借夫之間

尋證本書之旱
頓阿

とある。これは春海文庫本にも共通するものであるが、続く（二〇丁裏）に、

此一冊以　仙洞御本令書写加校合者也
元和元年臘月廿八日　　李部王

とある。これは春海文庫本が書写奥書として「申出　禁裏御本使愚息通村書之　慶長九年蜡月中浣也足子素然（黒印）」となっていることとは異なる（愚息通村とは中院通村、素然とは父・中院通勝を指す）。

元和元年（一六一五）、仙洞御所に伝わる本を書写し、校合を加えた「李部王」という人物は、恐らく碩学として知られ、多くの古典文学を書写した式部卿宮智仁（としひと）親王であろう。細川幽斎より古今伝授を受けたことでも著名である。「李部」とは言うまでもなく、式部の唐名であり、「李部王」とは式部卿宮を指す。智仁親王は例えば『内外口伝歌共秘々』（書陵部蔵）の慶長七年（一六〇二）四月の奥書に「李部」と自署しており、「李部王」と自ら記すに不思議はないのではなかろうか（智仁親王の文学者としての足跡は、小高道子氏の一連の論考が詳細を極める）。

この判断が正しいとするならば、慶長九年（一六〇四）に禁裏の本を書写した中院通勝・通村父子とは別に、その十年余り後に、智仁親王もこの作品を書写したこととなる。この山岸文庫本は智仁親王の書写奥書を継承するもので、智仁親王書写本の形姿を今日伝えている。智仁親王自筆とは認定し得ないにしても、伝本研究上重要な位置を占めるものと思われる。

続く（二一丁表）に、

以或本一校旱

明和五年夏

為栄

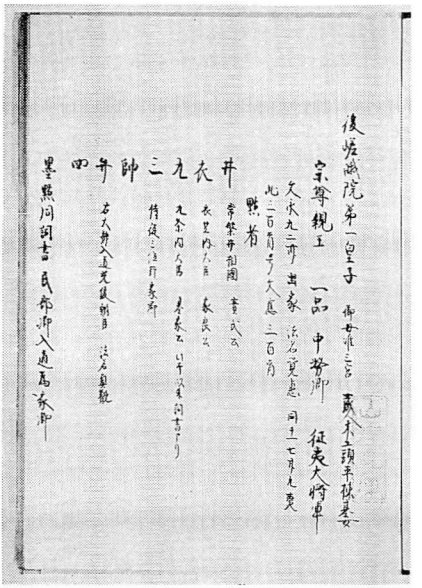
と青筆で記されている。「為栄」とは、下冷泉為栄である。この山岸文庫本に他本を参考にして、所々に青筆で校合を加えているのが下冷泉家の当代の為栄であり、山岸文庫本が明和五年（一七六八）の段階で下冷泉家に存在していたことがわかる。反御子左家的色彩の強い一類本系の本文を持つ山岸文庫本が冷泉家に旧蔵されていた事実は歴史のアイロニーであろうか。

裏見返しの、

冷泉家旧蔵也

昭和廿四年林鐘五　　岸廼舎

という山岸氏の識語も、この本が冷泉家旧蔵本であることを確認している。以上いまだ解明していない点も多いのであるが、後考を期すこととして、本書の解題の閉じめとしたい。



凡例

一、実践女子大学図書館山岸文庫蔵「宗尊親王三百首」一冊を底本として翻刻する。

一、翻刻は、朱筆等の別を含めて底本に忠実なるを旨とするが、印刷の都合などにより左のように処置する。

a、漢字・仮名は、おおむね通行字体によるが、一部書き癖（「ハ」「ミ」など）を残したところもある。

b、反復記号「ゝ」「〻」「〳〵」、補入記号、見せ消ちなどは原則として底本のままとする。猶、特に注記すべき箇所については〈注〉として示した。

c、朱筆は（　）内に記し、青筆はゴチックで記す。

一、丁は墨付を以て数え、丁移りは」として示し、その下の（　）内に丁数を記す。また、表裏は同じ（　）内にオ又はウとカタカナで記す。

一、改行は、原則として底本のままとする。

一、便宜上、歌番号を漢数字で仮に付した。

宗尊親王三百首　（題簽）　」（表紙）
（白紙）　」（見返し）
（白紙）　」（前遊紙オ）
（白紙）　」（前遊紙ウ）
後嵯峨院第一皇子　御母准三宮　蔵人木工頭平棟基女
宗尊親王　一品　中務卿　征夷大将軍
文永九二卅出家　法名覚惠　同十一七廿九薨
此三百首号文應三百首
點者
井　常磐井相國　實氏公
衣　衣笠内大臣　家良公
九　九条内大臣　基家公　此本以朱詞書アリ
三　侍従三位行家卿
帥
弁　右大辨入道光俊朝臣　法名真観
四
墨點同詞書　民部卿入道為家卿　」（一オ）
（白紙）　」（一ウ）

中務親王三百首和歌

春

一　井衣〇三弁　おほともの（續古今）ミつの濱松かすむなりはや日のもとに春やきぬらん

首尾相叶姿詞共調候本歌被取成候之躰殊珍重候

二　衣四三弁井衣四　あつま路のあふ坂山も関なれハいくつを越て春のきぬらん

三　いつくよりかすみそむらんあしひきの山にも野にも春ハきにけり

四　三弁　たちこむる春のかすみのうす衣なほ袖さえて淡雪そふる

五　衣二（ママ）井　山河のこほりの関やこえつらんいはまの浪に春かせそふく

春風や吹らん氷のとくるハとや候へきと存候

六　衣弁　つれもなきねをたにさそへうくひすのこそのやとりの春のはつかせ

是下句なと優美に候つれもなきねをたにとハ愚昧聊

不思得候之間巻過候

七　衣三弁帥　光なき谷のうくひすいかにしてよそなる春の色をしるらん

如此本歌存旨候之間故不申子細候

八　衣三帥　心にもかなはぬねをやつくすらんせりつむ野への春のうくひす

此鶯ハ面白めつらしく候へとも猶檜梅窓竹なとより

は甚ちかく聞候にや

九　弁帥　おく山のこそのしら雪けぬかうへにすかのねしのき鶯そなく

」（二一オ）

下句同前候

一〇 井衣二〈ママ〉風さゆる山のかけ野のはつ草のはつかにこその雪そのこれる

一一 井衣四三弁帥ふるさとのよしの丶山ハ雪消てひとひも霞たゝぬ日ハなし

たゝこれら躰にこそ歌は候へきと承候しか尤珍重候

一二 井衣四三弁春はまたかすみのそこに成にけり雲ゐにみえしかつらきの山

一三 井衣三弁をちこちの霞そふかき煙たつあさまのたけの春の明ほの

一四 井衣四三弁ふきハらふ嶺のあらしもうとけれは霞そ遠きさしの丶原」（二ウ）

武蔵野山遠き心近代満耳多目候めつらしけなく存候（口上面々珍重候）

処此嵐うとくて野霞とをき景気浮眼候歟

一五 井九三弁帥ひれふりしむかしを遠ミまつらかたかすみの袖に春かせそふく

一六 井二衣八ママ三弁帥こゝろあるあまのいそやハかすかにて霞にのこる松かうらしま（往事更浮眼候）

一七 井衣三九弁わたつ海の浪の千里やかすむらんやかぬしほせにたつけふりかな（續古今）しほかまのうらのひかたの明ほのに霞にのこるうき嶋の松　後鳥羽院御製）

あまりのことを申上候雖其憚候やかぬしほせなと申候事

ハ造立たる事にて非美麗之詞候歟

一八 井三衣たつぬらんたかしるへとハなけれとも梅か香さそふ庭の杢春かせ

一九 井衣三帥けふも又人のとはてやくれなゐのこそめの梅の花のさかりを（續古今）

二〇 井衣三帥袖にほふ山路の梅の花かつらゆふこえかゝる春のたひ人

二一 井衣三九帥梅花かをなつかしみ春の野にすミれもつまぬ旅ねしてけり」（三オ）

すミれもつまぬしほせの時申上候

三　井衣三九帥弁　ひるハ雪よるハ月そといひなさハ軒はの梅の花やなからん

雖其興候非本意候歟（殊銘心肝秀逸歟）

三　井　なにかあらぬ春もむかしの袖の上に梅かゝにほふふるさとの月

初句あまりにめつらしくや候らん（常聞習躰候）

二四　井衣三九帥　山のはハそこともみえぬ夕暮にかすみをいつる春の夜の月

二五　井衣三　あすか風河音ふけてたをやめの袖にかすめる春の夜の月（續古今）

二六　井三弁　きゝわたるなからの橋の跡ふりてあしまにかすむ春のよの月（妖艶詞句尤比西施顔色歟　殊幽玄候歟）

二七　井九帥三弁　春の夜のかすめる袖をけふりとてすこさぬあまをかこつ月かけ

第四句先々申上候結構躰候歟（實ニ無雙ニ歟）

二八　井衣四九三弁帥　こきまする柳さくらもなかりけりにしきの浦の春の明ほの

名

浦各雖珍重候花柳矢本意候歟

二九　衣四九弁帥　いひしらぬつらさそふらし鴈かねのいまハとかへる春のあけほの

三〇　井三帥弁　しのゝめの霞のころもきぬ〳〵にわかれてかへる春のかりかね

続後撰哥　前大納言基良

たちわかれてやかへるかりかねいく程かハらす候歟

三一　井九　さほ姫の春の衣のせきもゐすたつや霞にかへるかりかね

三三　九帥衣四弁　都をハすミうしとてや人やりの道ならなくに鴈の行らん

」（三ウ）

三三　九四弁　三師　松ならぬ柳か枝もたまつけてきなれの里に春雨そふる（本歌可謂雲泥歟）

上句定様候歟短慮難覃候（此春雨實ニ連玉章候歟）

三四　九衣帥　弁三　春雨ハふりにけらしなとをつらのあと河やなきふかみとりなり

是又あとかは柳或人の詠之時如此事廃忘至

愚難覃之由亡父申候き

三五　衣三　ふるさとの池のつゝミの柳原さすかに春ハわすれさりけり」（四オ）

慥雖不覚悟候近年見及候おもかけ候しやらん以此等

適愚黠之障と存候

三六　井衣四　弁　いまそふる若木の桜花さかハこの春よりや人のまたれん

毎句花麗返々かくこそ候たく候へ珍重候／＼

三七　井衣四　弁三　をとは山花さきぬらし相坂の関のこなたにほふ春風

三八　井衣　弁　一かたにうらみやハせんちらぬまの花のかさそふ春の山かせ（本歌に似過候歟古歌句之在所及三句同所著先達申無念之由候歟）

三九　井九衣　帥三　さくらさくあなしの山のやまかつら檜原をかけてにほふ春風

四〇　井九　衣三　かけうつすみきはの桜ちらぬまも花をそよする池のさゝなみ

四一　井弁九　帥衣四　峯ならて草葉にかゝる白雲や野中のもりの桜なるらん（凡無比類歟）

初五字草葉の雲も耳にたち候歟

四二　九衣帥　さくら色に雲のころもゝうつろひて霞の袖は花のかそする

四三　九帥弁　三衣四　花さかぬときはの山の嶺にたにさくらをミせてかゝる白雲（續古今　近代常事歟）返々感難旦千候」（四ウ）

四四　井三帥衣 四弁九 井帥三 九弁　ときは木にましりてさける山桜うつろふ色をいつならひけん

四五　いたつらに軒はのさくらうつろひぬ独さひしきなかめせしまに

新古今　　式子内親王

風よりさきにとふ人もかなと候歟

四六　九三 弁　かさすとておるたにおしき桜花大宮人よいとまなくとも

四七　衣三　あはれけにみせもきかせも花さかり人まつやとのうくひすの聲

初五字不幽玄候歟

四八　九弁衣 三帥　あはれしる心ありてやあたらよの月と花とに鴈の鳴らん

四九　井九帥 三弁 九　雪とふる花をこゝ路の空とミてしハしハとまれ春のかり金（同干信明歟）

五〇　かへるかり霞の空にねをたえてさそふ嵐の花をミしとや（已上三首其興過分候歟）（再三可握翫歟）

終句つよくきこえ候歟

五一　井弁衣 帥三　いかにせんあらしのさそふ花の山しはしとなかてかへる厂かね

五二　井九三帥 弁衣四　うかりける花にいつよりなれそめてちる春ことに物おもふらん

五三　三井九四 帥衣四　ちるとミてさらに我身のくやしきハ桜にそめし心なりけり

五四　三井 衣井　ちりぬれはとふ人もなし山里ハ庭のさくらのおしきのミかハ（已上四首速珍重候）

五五　九帥衣 四弁三　ときはなる松にもおなし春風のいかにふけはか花のちるらん

五六　井九帥 衣四弁 九衣　ときはなる物にしあらねハ山桜あはれあなうとちるをミるかな

五七　するハ雲もとにハ雪とちる花のをくれさきたつ春の山かせ（両首如代直千金歟）

」（五オ）

五八　九衣三　あかすミる人もはかなきあたし世におしまれんとや花のちるらん

巳上二首故不申子細

五九　井三　吉野川いはまふきこす春風におられぬ浪の花もちりけり

六〇　九帥衣三弁　さくら色の衣ふきかへす春風に夢となり行花のおもかけ（よしの河せかはや春のやすらハんおられぬ花の浪のうたかた　後鳥羽院御製）

六一　井三弁九　とのもりの心ある花のもゝしきにあさきよめする庭の春風（不可説に候歟）

六二　井九衣四弁　かきりあれは日数ハのこる春風にわかれていそく山さくらかな（不可劣千本歌歟）」（五ウ）

六三　井三衣帥弁　あらしふくたかねのこすゑ雲消て花の跡もる有明の月

六四　井九衣三弁　さきてちるつらさもしらぬわたつ海の浪の花ふく春の浦風（此風情先に人別雖詠於愚意落葉可然落花ハ弥木晴て月難漏候歟）

六五　三弁井衣　山ふきハいはての里の春よりやくちなし染の花に咲けん

六六　九衣三　あすからハゆきゝの人やかさすらん岡へのつゝしいまさかりなり（心詞尤被思入歟）

終句近代満耳目候

六七　九衣三帥弁　花さそふ風をたよりのしるへにて跡なきかたに春そくれゆく

六八　衣三弁帥　うくひすハ物うかるねにうらふれて野上のかたに春そくれゆく

第四句不優候歟

六九　井三衣四九井衣　とゝまらぬ事をあまたにしたへとや春のわかれにかへるかりかね（不可劣本歌歟遅桜歌歟）

七〇　くれかゝるけふハやよひのすゑの松夕浪こえて春やゆくらん

夏

七一　井九三（0）　雲のゐるとを山鳥のをそさくら心なかくものこるはるかな（續古今）（イロハ）」（六オ）

姿詞尤珍重候但山鳥尾と存候緒非本意候

七三　〃　空にミし霞の衣はるすきていまハかきほにさらす卯の花

七四　〃　あけぬとも猶かけのこせ白妙の卯花山のみしか夜の月

七五　〃　井衣四三　九弁帥　まちわひてこよひもあけぬ郭公たかつれなさに音をならひけん

七六　〃　九衣弁　帥四三　人ならはわひつゝやねん時鳥いとゝまたるゝ夜半のむらさめ（尤絶妙歟）

七七　〃　井衣　三　たつねてもいかゝまちミん郭公はつねつれなき三輪の山本（勝于本歌再三可詠）

七八　〃　九井帥　三弁　あふ坂の関のとやまのほとゝきすあくる雲井に初音なく也

七九　〃　井衣三　弁九帥　いとゝまた夢てふ物をたのめとやおもひねになくほとゝきすかな

八〇　〃　井衣帥　三弁九　この比をいつとさためて郭公をのか五月もつれなかるらん（是なと大方無子細候）

八一　〃　衣九　九弁　鳥なきてあけゆく夜半の郭公なとか八聲をならハさりけん

八二　〃　井三　帥衣　さなへとるあへの田面の村雨に坂こえてなくほとゝきすかな（此二首殊めつらしく候）

さかこえてあへの田のも近代ミなれたるやうに候へとも

この郭公さなへもおもしろくとりなされて候にや」（六ウ）

八三　〃　九衣　三帥　あれハつるあすかの里の郭公宮こをとをミねをやなくらん

八四　〃　井九衣　弁三帥　たちはなの陰なき山のほとゝきすやとかりかねて音をや鳴らん

第二句又結構の心。仕候て障と存候

八五　〃　井弁　衣帥　しほたるゝねをやなくらん郭公とハたの浦の五月雨の比

八六　〃　衣弁　三　うら人のとるやさなへもたゆむらんひちきのなたの五月雨の比

第二句いとみなれてもおほえ候ハす名所から不幽玄
之界候覧

八六 九帥弁 三衣 水まさるにふの河瀬の五月雨に杣人しらぬまきなかるめり
是も妖艶のすかたにてハ候ハねともけにもさそ候覧
とおほえ候

八七 井衣弁 帥三 露にたにみかさといひし宮きのゝ木のしたくらき五月雨の比（新千載）
殊勝珍重候」（七オ）

八八 井衣弁 四三帥 ほにいてぬまのゝ入江のしのすゝきかねて浪こす五月雨の比
八九 四 九衣 しほのミつ入江の松の木のまよりみえてすくなきみしか夜の月（らく）

九〇 九弁 帥 むら雲のうつれはかハるなかめかな夕立しつる山のはの月
是ハさせる難にてハ候ハねとも事次に申上候あはれは
あはれなることなかめハなかむる事に詠へしあはれといふ
物なかめといふ物別にある様に其躰ハ不可詠之由
亡父まさしく申候き又第四句もつよくきこえ候にや

九一 井衣 三九 九帥 いつくにか宿をもからんありま山いなのゝ原の夕たちの空

九二 三 せはくともわらやの軒に立よらん夕立むかふあふ坂の関
初第四句不幽玄之躰候歟

九三 井衣 帥 つま木とるしつはたをひの夕すゝミかたふきかふる谷のしたかせ」（七ウ）

妻木こるしつも帯は定候覧旗ハいかゝ候覧と存候
如此事不知子細候俊頼朝臣しつハた帯のかたむすひと
詠候にも若しつかはたにつきたる帯候歟万葉集にも
綏旗帯とかきて候

九四　井九衣／四三弁／九帥三／衣　うちなひく野嶋かさきの夏草に夕浪かけてうらかせそ吹
九五　身を秋のしつか山路に入もせんこゝハなつのゝしけき世中
（尤驚目候歟）
故不申是非

九六　井衣弁／帥三　夏草のしけミかしたのわすれ水たえ〳〵みえてゆくほたるかな
慥雖不覚悟候上下句近年多見候心地仕候

九七　九衣三／帥弁／井衣三／帥九　たえ〳〵に影をはみせてあすか井にみま草かくれとふほたるかな
九八　かけろふのいはかきふちの草かくれあるかなきかに飛ほたるかな
上句不優候歟

九九　井三／帥　夏ふかきさハのほたるもみたれあしの一夜ふたよに秋やきぬらん
（此十二字ナシ／蛍火乱飛寶秋氣近殊勝候歟）

一〇〇　弁三／帥九／井衣四　ミなかミにたれかみそきをしかま川海にいてたるあさのゆふして」（八オ）
（非言語所及歟）
此筋磨河近年多人詠候此あさのゆふして海に
いてゝ水上のみそきをしる心殊珍重おなし事もかくハ
なと仕候はぬやらん存候

秋

一〇一 井九帥 弁衣三 このねぬるあさ露かけて玉たれのこすの大野に秋ハきにけり
（詞のよせ殊みところおほく候歟）
ことからたくみに目出候へとも猶障と存候

一〇二 九衣帥 けさミれは露そひまなきあしのやのこやの一夜に秋やきぬらん

一〇三 井 ミなとかせすゝしくなりぬ水くきの岡のあさけに秋やきぬらん

一〇四 井九帥 三弁衣 さひしさハさらてもたえぬ山里にいかにせよとか秋のきぬらん

一〇五 井九帥 三弁衣 いまよりのあはれをいかにしのはまし外山の庵の秋のはつかせ

一〇六 弁九帥 井衣三 うたゝねの床の秋かせふきそめてまたひとへなる袖そ露けき

一〇七 井衣 三弁 ふけ行は月さへいりぬ天河浅瀬しらなミさそたとるらん

一〇八 井衣 帥弁 たか世より身にしむ色と成ぬらん秋の夕のおきのうはかせ
（以外やすらかにゆゝしく候歟）

一〇九 とけそむる千草の花の下ひもにむすひかへたる秋のしら露

一一〇 九三 とへかなしなまかきの萩の花盛あさをく露の消やらぬまを

一一一 井三 弁 名にめてゝおる人もなし女郎花とはれぬ庭の秋のゆふくれ

心詞毎句珍重返々難有躰候歟〈注1〉

一一三 九弁 ふるさとのみかきか原の藤はかまたかぬきかけし匂ひなるらん

一一三 九三 弁衣 涙にハ秋のゆふへハつけなくにあはれしらする袖の露かな
（尤感涙得便宜候歟）

一一四 井衣三 弁帥 草も木も露そこほるゝ大かたの秋のあはれや涙なるらむ

一一五 九弁 衣三 わか身いかに秋のならひの涙にもことはり過てぬるゝ袖かな

」（八ウ）

（殊以老涙不堪歟）
初句すこし耳にたち候歟

一六　九弁三　秋はきの花のまかきのあれしよりおなし野原と鹿や鳴らん」（九オ）

一七　井衣九　つき草の花田のをひのゆふは山絶ぬる妻を鹿や恋らん
色こと
無何色こと面白珍重に候へとも老心亂て不心得候

一八　九井衣三　秋霧のふかきみ山にたつ鹿もおもひつきせぬ音をや鳴らん

一九　井　おほかたに秋ハかなしき風の音も夕はわきて袖はぬれける
（已上三首鹿短慮難弁歟）

第四句又不覚悟候近代定多候歟

二〇　九井衣三帥　かりほさすしつきの田井に露ちりてを花吹しく秋の夕風
（是又美然歟）
此田井も疎遠候之間不能申是非候

二一　井三衣帥　かりにたに問人もなき深草の野へをはかれす秋風そふく

二二　井三　色かハる野へよりもなをさひしきハ朽木の杣の秋の夕くれ
（水無瀬殿秋十首　後久我太政大臣）
（花さかぬならひなりともいかゝせん朽木の杣の秋の夕くれ）

寂蓮法師

さひしさハその色としもなかりけり槙たつ山の秋の」（九ウ）
夕暮と仕て候同躰候歟

二三　九帥衣三弁　遠さかるあまのを舟もあはれなりゆらのミなとの秋の夕暮

二四　衣四三　おり〳〵のなかめハすれと。さひしさのことにもあるか。秋の夕くれ
（第一傷心性秀逸歟）

二五　九衣帥　よしやたゝおもひもいれしこれも又つもれは老の秋のゆふくれ
（業平風情尤。同准歟）
是因

二六　九弁帥　雲までもあはれにたへぬけしきかな秋のゆふへのむら雨の空

是も次に申上候氣色をいふ詞強不可好詠之由亡夫

申候き

三七 井衣弁 はつ鴈もなきてきにけりうきことをおもひつらぬる秋の夕暮（本歌似過歟）

三八 九衣三 秋風に草葉色つくかた岡のむかへの嶺に鴈ハきにけり（高増神妙ニ恩歟）

三九 九帥衣弁三 外山なるま木の葉そよく夕暮に初鴈なきて秋風そふく（此ま木の葉ハ伝柿本之遺柱歟）

三〇 三＼九帥 あらち山かりかねさむみやたのゝにあさち色つく秋かせそふく

三一 ＼三弁 はつ鴈の嶺とひこゆるおほひはに霜をきあまる秋のよの月

昔建保の比（注2）高帥口口左右歟このおほひハゝよゝミたる人候しかはおそろしといふ事にて候しかともこの比ハさならぬ事もおほく候うへ是ハ面影あまりて面白みえ候にや

三二 井衣弁帥三 しら雲の跡なき嶺に出にけり月の御舟も風をたよりに

にの字あまた指合候歟　小野

花の色ハうつりにけりないたつらに我身世にふるなかめせしまに是ハ秀逸候へは何事歟

三三 九衣弁 あまの河月の御舟ののほりせにみかくはかりやわたす棚はしのほり瀬大井河よりもやさしからすや候覧か様事

一旦ハおもしろく候へとも誠しき事にハいかゝと存候（新後撰）

三四 衣四弁＼三 雲ハらふ夕風わたるさゝの葉の深山さやかにいつる月かげ

」（一〇オ）

たゝかやうにやすらかにうつくしうこそありたく存候へ」（一〇ウ）

一三五　井九　衣三　一本の松はくもりもなかりけるみのゝを山の秋の夜の月

一三六　九衣　三　うつらなく野へのあさちの露の上に床をならへて月そやとれる

第四句もとめたる様にや候覧猶障と存候

一三七　九衣　三弁　中〳〵〈注3〉に木のはかくれもあはれなり秋のけしきの杜の月かけ

是又障候歟

一三八　九衣　四弁　津の国のいく田の森に人はこて月にことゝふ夜半の秋かせ

一三九　井九衣　帥三弁　山鳥のをたえの橋にかゝみかけなかきよ渡る秋の月かけ

（四首月興多得風骨）

山鳥の緒の事已前に申上候了是又姿詞たくみ

候歟

一四〇　九衣四　弁帥　いはたかきしほたの海（川イ）に舟うけてさしのほりたる月をミるかな

（無物に取喩歟）

是も詞つきちからあるさまに。（ハ）候歟

一四一　九衣三　帥弁　舟出するあかしのとなミ霧晴てしまかくれなき月をミるかな

一四二　衣帥　弁三　舟出していまこそミつれたまの浦のはなれ小嶋の秋のよの月

一四三　三帥　弁　鴈のくるしほちの末をみわたさせは月によこきるあまの釣舟

巳上三艘又障候歟

一四四　九衣　三帥　九　さゝ浪やしかつのうらハあれはてゝひとりや月の宮木もるらん

（湖上景氣招高躰歟）

一四五　三　いとまなきなたのあま人秋のよハやすくもねすて月をみるかな」（一一オ）

第四句やすらかならす候歟（拝見更不可飽歟）

一四六 井九 三弁 いつまてかたつる煙をうらミけんあるゝしほやの秋のよの月

一四七 井九 三帥弁 衣弁 井九衣四 うらミつる煙もうすく成にけりあまのとまやの明かたの月

一四八 さそなうきすまの関守なのミしてとゝめぬ月の有明のそら（此両首為月眺烟之興雖相似塩屋下句猶可勝歟）

一四九 帥 九弁 有明のつれなき嶺にすむ鹿も月にわかれのねをや鳴らん

一五〇 九帥衣 三弁 うき雲をとを山。すそに分過て嶺にわかるゝ秋のむら雨（殊銘心肝歟）の

景氣面白みえ候へとも其情不分明候之間暫巻過候（拭涙断腸之一篇歟）

」（一一ウ）

一五一 弁 九三 われからの袖とやあまもしほるらんたまもかる浦の秋の村雨

一五二 帥弁 三衣 八重とつるむくらの門をふきあけて野分そ宿の道ハみせける（是又面白歟）

第三句不優候

一五三 弁九帥 井三衣四 九三 露むすふ田つらの庵の月かけにをしね色つく秋風そふく

一五四 帥 いかはかり夜さむなるらんふるさとにひとりある人の袖の秋風（秋月秋風有興有感歟）

續後撰歌夜風をさむミふる里に独ある人や衣うつらんと候歟

一五五 井九 三帥 いつミ河かは風さむし今よりやくにの都はころもうつらん

一五六 井 九 三帥 ま萩ちる遠さとをのゝ秋風に花すり衣いまやうつらん（續古今）

一五七 弁 家ゐしてたかすむならし玉嶋のこの河かミに衣うつ聲（已上三首とり〳〵歟）

一五八 三帥 衣 夜半にふく浦風さむミあらき田のゝさかの里ハ衣うつらん（川イ）（し）（なりイ）

已上二首障と存候

一五九　三弁\帥　たつた山しくれぬさきの秋風に先うつろふハこゝろ也けり

一六〇　帥\衣　をはつせの山の木の葉や染つらん伏見の里に時雨ふる也」（一二オ）

一六一　井九\三　時雨つるもみちの山ハ雲はれて夕日うつろふ嶺の秋かせ

一六二　九三衣\帥弁　ミなふちのほそ河山そしくるめるま弓の紅葉いまさかりかも

山名やさしからす候にや

一六三　井三九\帥衣　ものゝふのやしほにみゆる紅葉はやま弓の岡の梢なるらん

一六四　九帥三\衣弁　なく鹿の聲きく時の山さとをもみちふミ分とふ人もかな（還以無念不能子細候）

一六五　九弁\衣〇　露ふかきを花かもとのきり〳〵すさておもひあるねをや鳴らん（續古今　本歌のおもかけ殊以無術候）

一六六　弁\九衣四　なかき夜のたけたの原のきり〳〵すうきふししけきねをや鳴らん

一六七　九井衣\三　まくす原また霜をかぬ秋風にまつうらかるゝ松虫の聲

一六八　\九　たれも又くれゆく秋ハかなしきにをのれひとりと虫の鳴らん

一六九　九衣三\　暮てゆく秋ハとまらぬ夕風にかへりやすきハ野へのくす原（已上四首殊絶妙之詞花歟）

一七〇　弁井\衣三　久かたのあまの岩戸の関路にもとまらて秋のけふやゆくらん（此下句秀逸之至感歟）

いはとの関も新勅撰以後満耳目候但猶珍重候（此関之暮秋可比。彼好忠初秋歟）」（一二ウ）

冬

一七一　九弁三\帥衣　ときは今ハ冬になりぬとしくるめり遠き山辺に雲のかゝれる

一七二　三帥井\九衣四　秋の色を木にも草にも染はてゝ竹の葉そよきふる時雨かな

一七三　九弁\井三　もしほやく煙を雲のたよりにて時雨をいそくすまのうら風

一七四　九弁　井衣三　うき雲ハはれぬる跡の月かけにしくれのこれる嶺の松かせ

一七五　井衣四　三帥弁　しくるへき氣しきをみする山風に先さき立てふる木葉かな（續古今　已上四首尤宜歟）

氣しき已前に申上候（上手之所為顕然候歟）

一七六　衣三　つもりてハふちとやならんミなの河あらしにおつる嶺の紅葉ゝ

一七七　九三　衣　さそひゆく木のはをやかてせきとめてこほりそめぬる谷河の水

一七八　弁　九帥　きくのさくまかきや山とみえつらん暮にし秋の色のやとれる

一七九　井衣四　弁帥三　さひしさハ身にそふ物と成にけり秋より後の夕くれの空（更以無敵對歟）

一八〇　九弁帥　衣三　これも又夕ハまたしあさかほの枯葉のうへにをけるあさ霜

」（一三オ）

已上二首聊存旨候

一八一　井三九帥　衣四弁　日かけさすかれのゝまくす霜とけて過にし秋にかへる露かな（如法秀逸也下句なと争如此可候哉）

一八二　九衣三　霜こほるあしまの月のさゆるよに聲うらかれて千鳥鳴なり

一八三　弁帥　衣三　有景氣歟　帥　井弁　こま山のあらしやさむきいつミ河わたりをとをミ千鳥なく也

一八四　九衣　あへの嶋いはうつ浪のよるさえてすむともきかぬ千鳥鳴也

一八五　九帥衣　三弁　むろの浦のしほひのかたのさ夜千鳥なき嶋かけてせと渡る也

已上三首障と存候

一八六　衣弁　帥　ふるさとのかハらの千とりうらふれてさほ風さむし有明の月

河原千鳥無念候歟（已上両首存古躰歟）

一八七　九弁三　帥　さか木とる大宮人の袖の上に八たち霜をく有明の月（さか木とるやそうち人の袖のうへに神代をかけてのこる月かけ　土御門院御製）

一八八　三帥弁　わきもこか袖にみたるゝ玉かつら夕風さえてあられふる也

一八九　衣四弁　九帥井　雪ハたかことの葉なれはふるまゝにたのめぬ人の猶またるらん

一九〇　九井衣弁　（此風情凡夫不思寄歟）　ひまさむきいほのさゝかきうつもれて一夜の程に雪そつもれる

一九一　九弁三衣　さらてたにさひしくみえし一本のなるをの松に雪ふりにけり

一九二　九井衣帥三弁　（見一本松葉動万歳之藻思歟）　浪かくるむこのうら風音さえてあはしましろく雪そつもれる

しろきと申候詞又亡夫申旨候き

一九三　九衣三弁　ふきおろすあそ山あらしけさ冴て冬野をひろミ雪そつもれる

一九四　九井三弁　白雪のとこしく嶺のこけむしろミとりハ冬や色かはるらん

一九五　（已上三首水陸之雪多見所歟）　よもすから此いちしはをおりたきて雪にそあかす大原のさと

一九六　井九三帥弁　（風情尤深候）　花とミるこ松かうれの白雪を日影やさそふあらしなるらむ

已上四首障と存候て罷過候

一九七　井衣三弁　まきの屋につもれる雪やとけぬらん雨にしられぬ軒の玉水

一九八　井衣三弁九　またさかぬ冬木の梅の花の枝にかつ色みえてつもるしら雪

一九九　九三井九衣　雪の中に炭やく山やふしのねに立もかハらぬ烟なるらん

二〇〇　四三帥　（已上両首尤可然歟）　かすみより霜夜に月をなかめきてつもれる老とくるゝとしかな

戀

二〇一　九衣三弁帥　きのふみし人の心にかゝるかなこれやおもひのはしめなるらん

上句あまりにたゝ詞にてや候覧

」（一三ウ）

」（一四オ）

二〇三 九衣四 こひそむるからあひのきぬの色に出てふかき心をしらせてしかな

二〇三 三 井衣 くれなゐのはつ花そめのした衣人こそしらねふかき心を

二〇四 九衣四 三弁師 中〳〵によそにもみしとおもふこそ人めをしのふあまり也けり

是又上句うちとけてや候覧

二〇五 井衣三九弁師 しのふ山心のおくにたつ雲のはれぬおもひはしる人もなし

二〇六 井弁衣三九師 人しれぬしのふの山になく鹿もねにたてゝこそ妻をこふらめ

二〇七 九衣三弁 ほのかにもミてを戀はやしのすゝき相坂山の名はしらすとも

二〇八 井九衣三弁 おもふともいはての杜のミしめ縄くるしやなにとしのひそめけん

二〇九 井九三師 衣四弁 うちもねすしのふ心のあらはれはしらねまくらを猶やかこたん

二一〇 九井師 衣三 したもえのあまのたくもの夕煙すゑこそしらね心よはさを

二一一 衣三 師 物おもふみしまかくれをゆく舟のほにこそみえね浦風そふく

（已上両首興味争定文又論實方歟）

新勅撰　　行能卿

かすならぬみしまかくれにこく舟と詠候歟

二一二 井三九弁 衣四 とにかくにこかれて物をおもふかなしほやく浦のあまの釣舟

二一三 井九 三衣 三師 ことゝハんしほやの里にすむ海人のわかことからき物やおもふと

二一四 衣 消かへりくゆるおもひになからへてはてハけふりの夕暮そうき

故存旨候

二一五 井三衣 師弁 下もえにたえぬ煙の末よりや戀すてふ名の空に立らん

」（一四ウ）

二六　井衣三　九帥弁　人しれすこやにたく火の下煙いかなるひまにうき名たつらん

二七　帥弁　衣三　またあはぬつらさもかなし人の身をならハし物とたれかいひけん（両首下句相叶上句尤可賞歟）

二八　井弁三　いのりけんかものみあれのもろかつらかけても人にあふひありやと」（一五オ）

二九　九四三帥衣弁　いかにしてよそにもみむとおもひしハつらきになれぬ心なりけり

三〇　井九三弁帥　さりともと人のなさけをたのむかなつらき心も岩木ならねは（神也妙也可賞可翫歟）

三一　九三帥弁　なかしとそおもひハてぬるあはてのミひとり月ミる秋のよな〳〵（敷度雖詠不可飽歟）

三三　衣三　にはつ鳥かけのたれおの打はへてなかき夜すからみたれてそ思

三三　井衣三九弁　山とりのをろのはつかにミし人のかけをとゝむるかゝミ也せは

三四　九　ことの葉のあとなき末をたつねてもあはての森の木枯の風

三五　井弁　衣三　しくれにもつれなき松ハある物を涙にたへぬ袖の色かな

三六　九井衣　帥三弁　袖にあまる涙の露やしくるらん秋のならひといひハなすとも

無指要文字餘事強不可好之由亡夫同申候し以事（此風情當出来歟）

次申上候

三七　九帥衣　三弁　ほしわふる袖のためしよなにならん草葉も秋そ露ハをさける

三八　九三帥　朽にけり袖やむかしの袖ならぬつゝむなミたハもとの身にして（道理尤可然歟）

三九　衣帥三弁九　ひろ瀬河あさきハ人のちきるにて袖つく波ハほすひまもなし（是等ハ秀逸之中ニハ此本歌當見難候歟）」（一五ウ）

三〇　九衣四　あちきなや人の心のうきにさへたゝわれからと身をうらミつゝ

三一　むすひをきし契よいかに岩代のまつにむなしきよをかさぬらん

二三三 三九帥衣四弁 中〳〵にたのめぬよはそまたれける人のこゝろのかハるならひに

二三三 三帥弁 ふけすともまたてやねなん月にたにこさりし物をよひの村雨

二三四 九三衣 帥弁 雨ふらハうらみさらましこぬ人のこゝろみえたる夜半の月かけ

二三五 四三弁帥 井九衣 あはれなる身（雖出来歟）のおもひかな偽の人のちぎりをなくさめにして

第四句不優候歟

二三六 井三帥衣 いく秋のなミたの露をハらひかね物おもふ袖に月をミるらん

二三七 衣三 物おもふ我からくもる月かけをなミたのとかを何うらむらん

二三八 弁九衣 三帥 九三弁 いのらすよゆふしてかけしかたそきのゆきあひ遠き契なれとハ

二三九 有明をなにつれしとおもひけん夜ふかき月におきわかれつゝ

二四〇 衣帥三 あか月ハうきものそとハいにしへのたか別よりうらみそめけん

二四一 井衣三九 暁はうき時なれはあふ坂のゆふ尋鳥も音をやなくらん

二四二 井九 あか月ハうらミてのミやかへるらんわかれちにおふる葛のしたかせ

二四三 衣九 弁帥 くれなゐとちきりても猶かなしきハさためなき世の暁のそら

存旨候之間罷過候

二四四 井九衣 三弁 わすれしといひてわかれし暁もなにのつらさに袖のぬれけん

二四五 九三 帥 なきぬとて鳥よりさきにいそきしやわするゝ中のはしめ成けん

（両首別恋尤優美候歟）

已上二首又障と存候

二四六 井三 ありしよのかたみと何をなかめまし月にわかれぬわか身也せは

」（一六オ）

二四七　井三九　わすれしとちきらさりせはかねてよりおもひしまゝのわか身ならまし

二四八　衣三　おもはすよねくたれかミのそのまゝにみたれて人をこひんものとハ　」（一六ウ）

二四九　九　かつらきやくめの岩はし神かけて契し中のいつたえにけん

二五〇　衣三弁　うたゝねにたのむはかりの夢もかな戀てふことのなくさめにせん

二五一　九帥三弁　衣四　夢の中にゆきてやミましかへすてふ夜はの衣のうらのはつしま

二五二　井九衣　三弁　ミる夢のなこりもつらし今ハたゝかへさてねなんよはのさ衣（不向戒仙法師歟）

第三句無念候歟

二五三　井九　三　もろこしも夢にミしかハとハかりを夜な〳〵ことにたのむはかなさ

玉ほこのみち行人ほとゝきすなくや五月とハ可詠桜

ちる木の下風なとハ不可詠之由亡夫申候き

二五四　九　弁　九帥　うらミわひかへすころもの関すへておもひたえたる夢のかよひち

二五五　三衣　夢にたにあひミることをたえねとやぬるひまもなきおもひ成らん

二五六　井九　衣三　おもひあまりくるれハたのむ夢ちにもたえぬる中ハあふひまもなし

（已上七首夜夢絶妙也勝劣可見合點歟）

已上二首又障と存候

二五七　九衣　四　しらさりきわか玉のをハなからへてあひミし中のたえんものとは

二五八　九衣四　弁帥　わたつ海の底の玉ものミかくれてみたれてそおもふあふよしをなミ

二五九　九衣三　帥弁　衣三　あふ事ハなたのしほせに行舟のいや遠さかる中そかなしき

二六〇　帥　逢ことハなすのゆりかねいつまてかくたけて戀にしつミはつへき　」（一七オ）

二六一 井弁 あふこともいまハむなしき空蟬の羽にをく露のきえやはてなん

二六二 わするなよ身を浮雲ハへたつをもよな〳〵なれし袖の月かけ

二六三 衣三九弁 身を秋の袖の月かけふけにけりかハるちきりの末の涙に

已上又障と存候

二六四 井三衣四九弁帥 をく露も色こそかはれあた人のわれをふるせる秋のたもとに

二六五 九帥衣四弁三 うつろはゝ色(无宜歟)かはれとや契置しうき身しりける袖の露かな

二六六 井衣四三 あたにちる花よりも(無二無三歟)猶はかなきはうつろふ人の心なりけり

二六七 井九三 うつり行人の心の花かつら後の世かけてなにたのミけん」(一七ウ)

又障と存候

二六八 弁衣三九 相坂の関路におふるさねかつらかれにし後ハくる人もなし

二六九 〳〵 うらミても里をハかれぬくすかつらくるしき物とたれをまつらん(本歌似過歟)

二七〇 三帥衣井九 まくす原(續古今)うらミし比の秋かせやかれ〳〵になるはしめなりけん

雜

二七一 井三帥九衣井九弁 かへりこん月日へたつな立わかれいな葉の山の嶺のしら雲

二七二 三帥衣三 ふるさとのさかひはるかになるみかたしほみちくれは行人もなし

二七三 弁(○) いかにねて(續古今)夢もむすはむ草まくら嵐ふく夜のさやの中山

二七四 九三弁衣四 月影にこよひは山の嶺こえぬたれか野原に枕ゆふらむ

其心不分明候之間障と存候

二七五　井九三帥弁　いはしろの松のしたねの草枕さてもむすはぬ夢そかなしき

二七六　衣帥　さゝまくらいく野の末にむすひきぬ一夜はかりの露の契りを（人丸定感申候歟）」（一八オ）

二七七　たひ衣を花か露をかたしきて野へにも浪のうきねしてけり

景気殊勝候但僧正遍昭風躰やすき候覧

二七八　井衣師三九　さゝのやのかりねのまくら夢たえて袖も夜さむの松風そふく

二七九　九三衣帥　ふるさとハとをつのはまの礒まくら山こえてこそ浪に成けれ

是又愚心迷て不分明候暫罷過候（自本歌下句猶勝歟）

二八〇　井弁九衣　うき枕またふしなれぬさゝ嶋の礒こす浪の音のはけしさ

二八一　井三帥河弁九井九三　何の名もことゝふ鳥もあらはれてすミたえぬるハミやこ也けり

二八二　帥衣弁井九三　たちかへりみてこそゆかめふしのねのめつらしけなきけふり也とも（續古今）

二八三　帥衣弁井九三　するかなるふしのしら雪きゆる日ハあれともけふりたえぬまハなし

二八四　帥衣弁井九三　みわたせはしほかせあらしひめ嶋の小松かうれにかゝるしらなみ

二八五　井三九帥　ほしわふる袖しの浦のあま人とひともみきはにもしほたれつゝ

二八六　井九衣帥三弁　いてゝミるむかひの岡のかゝミ草露にみかける月のかけかな

巳上又念して罷過候

二八七　三九帥弁　かきのこけかハらの松のふかみとり年ふりにけるやとゝみえつゝ

二八八　衣四三弁九帥　しつかすむとを山松のふかミとりうすきや里のけふりなるらん

二八九　衣三弁九帥　宮こ人とはぬもよしや山里ハさひしきにこそ心すミけれ」（一八ウ）

二九〇 三衣 きゝなれぬ松のあらしもかねてよりおもひしまゝのミ山へのさと
み山へのさとふくあらしかな不可詠之由亡夫慥申候き得
分加制止候

二九一 九三 帥井 山さとの軒はにたてるそなれ松なれても風の音のさひしさ

二九二 九帥 衣三 まへは海うしろは山の松かせに一かたならぬ波のをとかな
（凡非心之所及洞庭湖之松庵被思遣候）
はしめつかた不幽玄候歟

二九三 九帥 三井 井九 衣三 敷嶋ややまとしまねの外（ホカ）までもわたせハわたす夢のうき橋

二九四 夢の中に猶みるゆめや世中のはかなく過し昔なるらむ

二九五 九井 井三 衣 いたつらにあすかの河の瀬をはやミ過る月日のしからミもかな

二九六 はま千とりむかしの跡をたつねても猶みちしらぬわかの浦波
（三代御秀逸御相傳之上者故不加合點）
凡中〳〵ともかくも不能言上候

二九七 井衣帥 九三 千とせ山これやむかしのさゝれ石いはほにふかき苔の色かな
此山すこし似大嘗會歌候歟

二九八 井弁 帥 すみよしの浦はの松のふかミとりひさしかれとや神もうへけん

二九九 井三弁 九 ふかき 千世ふへき大内山の嶺の松いや年のはに色まさるらん

三〇〇 井三九 帥衣弁 もゝしきやあまてる神のますかゝミ君か御影をさそまもるらん

（是又秀逸歟神慮之實義忽以露顕不能左右之上

」（一九オ）

今賜此御詠已被許愚點老後之自愛候）　」（一九ウ）
以朱書之者九条前内府被註之
本云
此御歌先年書写之処為人被借失之間
尋證本書之早
頓阿　」（二〇オ）
此一冊以　仙洞御本令書写加校合者也
元和元年臘月廿八日　李部王　」（二〇ウ）
以或本一校早
明和五年夏
為栄　」（二一オ）
（白紙）　」（二一ウ）
冷泉家旧蔵本也
昭和廿四年林鐘五　岸廼舎　」（裏見返）
」（裏表紙）

〈注1〉「躰」の右に「程」と墨書するが、擦り消し。
〈注2〉虫損状態をそのまま書写。「高躰不能左右歟」とあるべきか。
〈注3〉合点を擦り消し。